



Title	Valle-Inclánの詩集『伝説のかおり』試訳及びその構成についての一考察
Author(s)	堀内, 研二
Citation	大阪外国語大学学報. 1979, 44, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80739">https://hdl.handle.net/11094/80739</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# Valle-Inclánの詩集『伝説のかおり』試訳 及びその構成についての一考察

堀 内 研 二

## Traducción de *Aromas de leyenda* de Valle-Inclán y un breve estudio sobre su estructura

Kenji Horiuchi

En este artículo presentaremos, en primer lugar, la traducción al japonés de *Aromas de leyenda* (1907), primer libro poético de Valle-Inclán. Después, estudiaremos sobre la estructura de esta obra modernista.

En el primero de los 14 poemas el poeta nos presenta con nostalgia los elementos fragmentarios del mundo gallego: la mañana fresca, la tarde serena, la leyenda piadosa, los caminos aldeanos, las cantigas, los mendigos, etc., los cuales van volando como el "Ave", su título, hacia los otros poemas que siguen. Por lo tanto, suponemos que este poema desempeña un papel muy importante en la obra toda.

Y al acabar de leer este libro de versos, nos damos cuenta de que todos los poemas se desenvuelven según la corriente de la conciencia del poeta y de que en la obra se canta el proceso de las andanzas mentales del poeta, quien busca una nueva inspiración poética en su patria lejana y sumergiéndose en su ambiente evocado rejuvenece su alma tan vieja y tan cansada.

Valle-Inclánはかなりの数に及ぶ小説、短編、戯曲と共に3つの詩集を発表している。それらは『伝説のかおり』*Aromas de leyenda*, (1907) 14編、『行人』*El pasajero*, (1920) 33編、『キフのパイプ』*La pipa de Kif*, (1919) 18編である。これらは1930年、『抒情詩のコード』*Claves líricas*の題名のもとにまとめられ出版されている。これに見るかぎり、生来の詩人Valleにしては詩による作品の数はさほど多くない。しかし、この3つの詩集には彼の美学のすべてが凝縮された形で盛り込まれている。すなわち、『伝説のかおり』は小説『聖なる花』*Flor de santidad* (1904)と密接な関係にあるもので、Valleの初期のモデルニズムの作風と彼の故郷ガリシアの素朴かつ神秘的な様相とが結びついて出来あがった作品であるし、『行人』はValleの中期の美学論集『不思議なランプ』*La lámpara maravillosa* (1916)の中で扱われている静寂主義の思想の韻文化であるし、また、『キフのパイプ』はValleの後期の独創的な作風エスperl

ペントに属し、「現実のグロテスクな置換」<sup>(2)</sup>がみられると言われている。

本稿では、この3つの詩集のうちの最初の作品『伝説のかおり』を扱うが、まずその邦訳を呈示し、次に、この詩集の構成について分析的考察を行なってみたい。



## 伝 説 の か お り

### —— 聖なる行者を称える詩 ——

#### コード I

#### 鳥

おお 朝の新鮮な草のかおりのする  
はるかなる故郷の はるかなる思い出よ！  
響きのよい湿潤なとうもろこし畑の地  
山の頂で 太陽が黄金の薔薇の花びらを  
めくり落すとき 目に見えぬ風の合唱隊が  
歌い 猛牛を身ぶるいさせる！

おお 十字架と伝説の深奥な道よ！  
松林で盗めた薪<sup>たきぎ</sup>を背負い  
たそがれに老婆らがよろめき通る  
晩にある声が昔話をかたり  
犬が遠くの藁小屋で吠えるとき  
その薪は 囲炉裏で煙る

おお 野鳩のさえずりにも似た  
ローマに生まれし古きことばの地よ！  
わが故郷の老いたる魂 おまえが  
古い歌の調べと共によぎるとき  
萌え出づる亜麻畑の緑の絹のごとく  
わが魂の湖が波立つのを覚える

おお故郷 忘れ去られし哀れなる乞食<sup>こじき</sup>の  
祖母よ！  
おまえの純朴な古謡の魂で口づけておくれ  
毎朝 冬の陽のさしこむ窓辺に  
もうひとりの祖母がよく置いていた  
あの林檎のごとく わが詩<sup>うた</sup>のかおるよう  
におお 年長し祖母たち はるかなる  
思い出よ！

## コード II

### 朝の奇蹟

むらの のどけさの  
澄んだ青のもと  
鐘が鳴っていた

朝の青い  
聖性のもと 震える  
田園の祈りよ

老道では  
小夜啼鳥がうたっていた  
光をおびた そのさえずり

むらの鐘は告げる  
その音で 小鳥に  
信ぜよと

むらの鐘は  
太陽の栄光のもと  
キリスト者の魂だった

鐘は鳴るときばらまいた  
聖母マリアの  
薔薇のかおりを

“鳥小屋のうら若き  
小鳥よ おまえには  
ガイタ弾きの魅力がある”

## コード III

### 哀れなる神の子たち

花咲く道を よるべなき  
めくら 癩病み 不随者の  
キャラバンがゆく

寒い夜に宿もなく  
昼の光のもと 糧食もない  
ゆえに 聖母マリアの子

<sup>ほこり</sup>埃は赤い傷口を焼き焦がし  
その祈りは 悲嘆の叫び  
埃の中を 枯葉のごとく進みゆく

彼らは畑のあぜ道をゆく  
牛飼娘のうたう  
野良の緑の道を

“そほ降る雨  
雨のそほ降り  
ライーニョの側も  
レストロベの側も”

コード IV

田園詩

朝の澄みわたる青のもと  
露に濡れ 鐘がめざめる  
老道を畑にむかい  
ゆっくりと農夫らがゆく 野良の道  
あけぼのの中を 妖怪じみた月にむかい  
かんむりひばりが飛翔を高めるとき

ピカレスクな水車といなかの織オリが  
パンと亜麻布の古い讃歌をうたい  
その鏡を銀色に輝かす堰の水は  
とうもろこし畑の中で 祈りを囁く  
疲弊した老婆のごとく震える水車は  
いにしえの時代の忘れ去られし美德を称える

稜ヒは自家製の上等な布の入った  
たんすの匂いを告げる  
水車小屋は 戸口のぶどう蔓で  
聖史の田園の謎を錯綜させ  
ぶどう棚のもと パンとぶどう酒との  
血と肉の神々しき婚約を称える

風は乾草のかおりに身をくるみ  
口をあけた畑のさくは ライ麦を待つ  
緑の草地の湿潤な彼方では  
牧童たちの中で 朱い牛が草を食む  
朝の青い聖性のもと  
あけぼのに濡れ むらの鐘がうたうとき

“花咲く薔薇に  
一羽の白鳩がとまっていた  
くちばしに 山の行者への  
パンをくわえて”

コード V

苦しみを語るなかれ

道のかたわらの  
郷士の館  
鶯ウに飾られた  
石のバルコニーで  
犬が喧しく吠えたてる  
道を進みゆく  
キャラバンにむかい吠えたてる！

郷士の館は 庭園の  
陰の中で眠る  
その古い庭園では  
静寂が助言  
ひとの声は何ら発せられぬ  
陰に埋もれた  
神秘が見張る！

郷士の庭園の  
天人花の奥では  
密かに 噴水が  
注釈する  
その水晶の魂の  
にこやかな謎  
噴水は 郷士の庭園の  
夢をささやく！

石のバルコニーでは  
ガラス窓のうしろで  
少女が微笑む  
太陽がほどき放つ  
朝の黄金の中  
ガラス窓のうしろで  
少女が微笑む！……

よるべなき者たちは  
朝の中で 立ち止まる  
小道から 乞食の  
苦しみをうめき発する  
哀れなるキャラバン  
生を享けし苦しみと  
明日を生きる苦しみと！

生の苦しみ  
それは 恐怖と痛み！……  
ぼくの道をゆく  
同志巡礼よ  
ガラス窓のうしろの  
花と咲く唇に  
苦しみを語るなかれ！

“わが子よお逃げ  
あたしは泣きますから  
戸口にすわり  
そば降る雨をごらん”

## コード VI

### たそがれの花

とうもろこし畑の中の赤い小道を  
戦士のように勇ましく 弩をふりまわし  
牧童たちが羊を導く 道の端を  
おとなしい牧群の庇護者のごとく  
猛々しいマスティン犬が歩く  
むき出した白い牙 あたりを窺う目

首の鈴がゆるやかに夢見心地に鳴る  
清らかな水をたたえた 清らかな噴水を求め  
渴して喘ぐ 母親羊  
そして滅びゆく陽を前に 雄山羊は  
力強く大地を蹴り二本足で立ち  
とうもろこし畑は祝婚歌をうたう

罪をあがなう行者の住いし  
庵のかぐわしい前庭で  
噴水が心臓のごとく鼓動する  
そして かぐわしい薬草を水に浸しつつ  
祈りと同時に呪いの戯言を  
いかさま医者がつぶやく

かの行者の伝説におけるがごとく  
噴水のほitori 小鳥がうたう  
清らかな水をたたえた 清らかな噴水  
噴水の水と水晶のさえずりは調和し  
聖杯の薔薇の香気を浴びた  
ひとつの顫音に結合する

“太陽と月の上  
小鳥が飛ぶ  
御子イエスに  
薔薇の花を運びつつ”

## コード VII

### ふたりの行者の対話

山の深い静寂の中  
そして 飛ぶと空を蔽いつくす  
鳥と秃鷹のすみか  
岩山の陰で  
聖セレニンと聖グンディアン  
ふたりの行者が問答していた

——聖セレニン すぐれた師よ  
法王や王侯たちに助言した  
そなたの大いなる博識は  
わが魂に助言し  
その暗闇に 白蠟の  
ろうそくを灯すことができようか？

——聖グンディアン すぐれた師  
かつ 神学の定義者よ  
全キリスト教世界の  
法王と王侯たちの聴罪師よ  
わが手の灯すろうそくは  
そなたにいかなるあかりも与えられぬ

——聖セレニン すぐれた師よ  
わが眼は 死の深淵を  
かいま見ようと欲している  
肉体が塵と化するとき  
われらが靈魂の飛びゆく  
善もしくは悪の深淵を

——聖グンディアン すぐれた師よ  
実りのとき 誰が小麦を数えたか  
また 飛びゆく鳥のとまり先  
一体誰が語ろうか  
さらに 弩の石や矢が  
いずこへ飛ぶか語ろうか？

——聖セレニン すぐれた師よ  
川が海にそそぐがごとく  
この世のものはなべて  
果てのない道をつくり出す  
つまり 鳥と石と矢は  
宙において永遠なのだ

—聖グンディアン すぐれた師よ

全知はそこにある  
神秘はすべて永劫に  
神秘の中に存するはず  
死のろうそくが 永遠の中  
われらを照らすまで

—聖セレニン すぐれた師よ

この世のすべての嵐といえど  
消せぬ その光  
わが吐息が消したがる  
生を感じる事の苦しみは  
あの世においても続くだろう！

—聖グンディアン すぐれた師よ

そなたが減ぶべき肉体の間  
昼間空を見上げると 陽の光が  
そなたの眼を眩ませよう  
そして 夜は蝙蝠サタンの  
黒いつばさが！

ふたりの行者はおし黙り  
祈りを唱えはじめた  
より老齡の聖セレニンの傍には  
ミサ集が開いてあった  
ミサ集では 骸骨が  
空洞のまなこを見開いていた

コード VIII

熾<sup>ま</sup>天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>鳥

かの聖なる行者の祝福のもと  
狼は牧群の中で ひかえめに草を食み  
牝狼の乳房は仔羊に乳を与え  
虫は蟻の巢に光明を送る  
蝸牛<sup>かたつむり</sup>の残す粘液には効能がある  
角を太陽にかざし 草むらをゆくとき

ひばりと鶯<sup>うぐいす</sup>は同じ枝をねぐらとし  
ふくろうは太陽の炎が恋しく思う  
さそりは鳩の運ぶ愛の象徴の  
香気を浴びた 純真さをもつ  
火蜥蜴<sup>かろせき</sup>は なべてのものを浄化する  
火の中で 神秘的な力を手に入れる  
すなわち 烙印により受ける毒は愛  
生はすべて愛 悪なるものは謎

愛の火に厳しいいばらが燃え  
いばらの中で 小夜啼鳥が歌を発する  
戦士天使長の銀色の冠毛と共に  
小道ののどけさの中を 上昇する水晶の声  
夢想の花のつばみを開かせる  
四月の庭の 甘美な魅惑の歌  
幻視の魂をもつ青い神秘の花は  
蒼穹の小鳥の 蒼穹の嘆願の祈りを  
三百年聞いた 噴水のほとり  
そこでは 聖者が手ずから注ぐ水のもと  
異教の笑みをたたえ 今なお笑う  
若い牧神に洗礼が行なわれていた

たそがれの魂は 風に花びらを落し  
風は物語の囁きで 奇蹟を囁く  
小鳥がたそがれの魂を永劫化している  
天水溜のほitori 無邪気な奇蹟を……  
星降る夜 姉の噴水と共に小鳥は  
三百年歌った  
庵には他の行者らが住みついていた  
そして 聖者は  
われらが主キリストの恵みである  
あの至福の中に住んでいた アーメン

おのが歌の光の中を 小鳥は飛翔を高め  
ねぐらへと飛んだ それは蒼穹の星  
聖者の眼に その星はきらめき  
天上の争いが止むと消えた  
彼は生を感じ泣いた ひどく老齢な老人であった  
噴水の鏡を眺き込んでも おのれと気づかず  
その髭は 祈りのごとく  
聖体の白さを胸元に添えていた  
夜空には神々しき道がたなびいていた  
それは巡礼に行く手を教える道  
月は理想の蒼白いさまよう亡魂  
その水晶の船は東にむかい飛んでいた  
聖者にとりいまだ月は 牧神に  
洗礼を行なったあの遠き日のものだった

幾世紀といえど過ぎ去れば  
一瞬のごとくであろう  
罪なるものは時間 憤怒と色情は  
死ぬまでわれらが生を織りなす時間の中味  
死にはもはや尺度はない  
それは夜 まったきの夜  
もしくは 神々しい夜明け  
甘松<sup>ナド</sup>のかおりと顛音の楽の音につつまれた  
すなわち 恵みのかおりと  
燃えあがる神秘の光に  
それは時のない永遠 そして聖体の幸せ

幻視する修道僧の胸元で ある炎が燃え  
香炉のごとくかおりを放っていた  
それは蒼穹の供物のかたみが  
伝説の光芒を放って残す輝き  
また 行者の庵の上では  
別の不思議な輝きが奇蹟を告げていた……

夜の天使のごとく飛翔する<sup>ミカド</sup>微風は  
無言の山に その翼の愛を与える  
山の頂では 夢のように白い光の鳥が  
地平線をのぞかせる

庵では牧神があかつきの鐘を鳴らす  
羊飼いの娘は群れの中であうたい  
行者は魂の庭に 朝の  
最初の薔薇が花ひらくのを覚える

“小鳥よインコ  
美しいギター弾き  
傷心したぼくの胸で  
うたっておくれ”

## コード IX

### 奇蹟の光芒

聖性のかおりを放ち  
すべての草が匂い  
朝の小棘雨のもと  
小道が震えていた  
聖グンディアンが  
山の庵に帰るとき

あけぼのの栄光の中で  
天上の鐘が鳴っていた  
草の魂は 愛と謙虚さに震え  
のどけさに満ちた大気のもと  
鐘と結ばれようとしていた

粉碎きのおかみが  
水車小屋の戸口にいた  
腰ひもに糸取り棒をつけ  
唇には歌のをせ  
その水車小屋を行者は  
一度も見たことがなかった

——おのが土地のかたわらで  
糸を紡ぐ粉碎きのおかみよ  
もしご存知ならば教えておくれ  
この道はいずこへゆくのか？  
わしときたら 夜の暗さのあるうちは  
道がわからないものじゃから

——苦行僧の洞穴ですよ  
岩山の奥にある  
——そなたの糸取り棒に亜麻の欠けぬよう  
亜麻畑には緑が そして  
水車小屋の石臼には  
はずみをつける水が

聖なる行者は彼女に礼をいい  
ゆるやかな足どりで 遠ざかった  
おのが僧庵に着いたとき  
粗ラシャの服の老人を目にとめた  
路傍の石に腰をかけ  
書物を読んでいた

——かくのごとき寂寥の中で  
修行をなさる行者どの  
いかがして来られたのかな？  
けして誰も来たことのないわしの小屋  
昨日生まれたばかりの檜の木が  
どうして百の齢を数えるように見えるのか？

苦行僧は ミサ集に  
傾けた目をあげ  
恭々しくも簡単に  
三度十字を切り 挨拶した  
聖グンティアンの帰還が  
夢の中で 告げられたのであった

——聖なる三世紀にわたり  
咲きほこる御髭の師よ  
あなたが天上の春の  
小夜啼鳥を聞かれてより  
この山の厳しさのもと  
行者はわたしで五人になります

聖者は顔に 奇蹟の  
燃えあがる息吹を感じた  
そして 薔薇の木のごとく  
薔薇の花に蔽われた榎の下  
ふたりの天使が 墓を  
掘ろうとしているのを見た……

コード X

ミサ集のページ

小夜啼鳥よ！ ひばりよ！……  
噴水のほとり 歌をうたうにこやかな小鳥  
清らかな水をたたえた 清らかな噴水で……  
薔薇の咲きほこる 榎の  
老木に隠れて 歌をうたう小鳥  
古い革のミサ集の上

かの聖者が祈りを唱えしミサ集  
彼は祈りながら聞いていた  
蒼穹の四月の 蒼穹の鳥の魅惑の歌  
われらが聖母マリアの  
金色の連禱を知る鳥  
神秘の百合よ！ 象牙の塔よ！

幻視の魂をもつ聖なる行者に  
封印された天上の扉を開く  
熱烈な祈りを知る鳥  
麦わらのゆりかごで 裸の御子が  
泣くとき われらが聖母の与える  
金色のかんむりひばり

理想の庭の青いうす闇の中で  
奇蹟に薔薇を咲かせた老枝を  
榎はまきちらす  
飾り書きのゴシック体の赤い頭文字で  
囚われの鳥がうたう  
金色のかんむりひばりよ！熾天使鳥よ！

“ぼくの胸でうたっておくれ  
そのさえずりで  
イエスと話す  
美しき小鳥よ！”

コード XI

フランチェスコのあやめ

むらの道は蛇行する  
林檎のような誇らかな  
ふたつの乳房のごとく  
双生のかぐわしい  
ふたつの丘の間  
丘の頂では 羊の群れが  
草を食んでいた

東の空では たそがれが  
花びらをめぐり落し  
緑に満ちみちた  
むらの道を  
キャラバンが通っていた  
血だらけの傷口は  
もう一輪の花！

鈴なりの毛虫  
それは 田園の風が  
道にめぐり落す  
アッシジの庭の花  
アッシジの聖フランチェスコが  
その口で聖油を注いだ  
神々しいあやめよ！

痛ましきキャラバンよ  
そなたらは たそがれの  
春の老道で  
聞くことであろう  
伝説の天上の鳥  
そして 主イエス・キリストが  
小道で口づけを下さろう

旅路の果て  
薔薇の野原で  
神秘の晩餐<sup>きん</sup>を得よう  
酸味のないパンと  
聖餐のぶどう園の酒  
そして 傷ついた手のひらには  
神秘の薔薇が花咲こう！

哀れなる人々は けがれなき  
亜麻の衣を得よう  
道の端で  
われらが聖母の紡ぐ  
あけぼのの光の亜麻  
そして 蒼穹の小夜啼鳥が  
亜麻の中でうたうだろう！

“早起きの  
美しき小夜啼鳥よ  
おまえの歌声には  
花の小糠雨”

## コード XII

### たそがれの太陽

たそがれの太陽 美しき空の長老よ  
おまえは死を間近かにひかえた  
祖父のごとく 山の頂に口づける  
美しきサマリアの乙女 たそがれが  
明日甦るよう おまえに香油を注ぐ  
微風かぜの笑みに 夾竹桃が  
いちばん美しい花を 祈りのごとく与える

たそがれの太陽 厳かな種まく人よ  
おまえは金色の小麦のごとき光の宝を  
われらの大地に送り届ける  
無限を抱える その厳かな腕で  
空から振りまく 生命の種の  
神聖なる飛翔のもと 震える大地に  
厳かな種まく人！ 美しき長老よ！

たそがれの太陽 むらの老人たちのよき友よ  
すべての英知が伝承された  
判官なき時代の 判官のごとく  
ぶどう棚の下 ベンチに腰かけ  
若者たちに助言を与え 灌漑と  
小作地の争いをおさめる 老人たちのよき友よ

たそがれの太陽 おまえは老人の笑みのごとく  
あの館の塔に そのほらかなる炎の光を注いでいた  
門には グレイハウンド犬がつながれ  
入口には ぶどう酒の匂いが漂っていた  
郷士たちのすみか それはある日貧しくも  
漂泊の旅に出たぼくの かつての家

“太陽が沈むとき  
岩山にふくろうが見えた  
おまえなど恐くない ふくろうよ  
ふくろうよ おまえなど恐くない”

## コード XIII

### ムニエイラの調べ

亜麻をうち砕く娘らがうたい  
水車小屋へゆく若者らがうたう  
そして 道ではすすめらが

トン！ トン！ トン！…亜麻うち機が打つ  
トン！ トン！ トン！…石臼がまわる  
そして ラ・アルネラの壺が走る……

林檎のかおりを放つ陽気なぶどう酒  
それはむら娘の唇の  
あの華やかな色彩をもつ

粉碎きの亭主は物語をかたり  
亜麻うち機では 百を数える  
そして 若者らはうわさ話に歓声をあげる

“若い娘らと おれは  
ある夜 水車小屋へ出かけた  
彼女らはみんなシュミーズ姿  
おれはズボンもはかず そのまん中さ！”

## コード XIV

### 道 に て

聖母マリアさま  
いづこでうたっているのか  
ぼくの希望の鳥は？……

聖ヤコブのごとく  
美男の巡礼が  
ぼくの道をゆくのを見た

ぼくは小道で立ち止まり  
伝説の素朴な  
大気を吸いこんだ

そして 祈りを唱えると  
翳りのある老いた  
ぼくの魂は激しく震えた

ぼくは進んでいった……やがて  
小道に光があらわれ  
ぼくはふたたび盲目になった

銀の糸取り棒で  
われらが聖母の紡ぐ  
あけぼのの光で盲目に！

“さわやかな小糠雨が  
朝の麦わらの上に！  
小糠雨 それは  
聖母マリアの恵み！”

★

★

★

筆者は最初この詩集がのどかな田園の情景や聖者の伝説、さらに悲惨な乞食の民の情景等が何の脈絡もないままに書き集められ成立したものと考えていたが、繰返し読んでいるうちに、詩集全体が詩人の意識の流れに従って書き進められているのではないかという思いに囚われた。しかも、この作品の構成を見るうえで、コードIがかなり重要な役割を果たしているのではないかと考えるようになった。

以下、筆者の抱いたこのような構成についての感想を裏づけるべく、詩の解釈もところどころまじえながら、この詩集の分析的考察を行なってみよう。

※

まずはじめに、コードI“鳥”の詩がもつ重要な役割について考えてみよう。これが詩人の故郷ガリシアへの郷愁の詩であることは誰の目にも明らかであろう。さらに筆者はこの詩において詩人の心の中に回想的に浮かんだ故郷のさまざまなイメージが以下の詩においてしばしば現われてくる点に気付いた。それはちょうど彼の心の中に *memorias* として巣食うイメージの鳥が、コードIの巣を飛び立ち、以下の詩にむかい飛んでいっている観を呈している。つまり、この詩が詩集全体のプロローグ的な役目を果たしているように思われるのだ。そして、飛んでいったイメージの鳥はそれぞれの詩の枝にとまり、情景のイメージをふくらませるべく華やかに歌っている。この詩の“鳥”というタイトルが、詩人の心に喚起されたガリシアの世界の断片的なイメージをあらわすものとするのはゆきすぎであろうか。この詩には「野鳩のさえずりにも似た」云々という鳥を表わす詩句があるが、これが詩全体において重要な意味をもっていない点をも考えたい。筆者はこのような解釈を行なうのである。

では、鳥のごとく以下の詩に羽ばたいていっているガリシアの世界の断片的なイメージとはどんなもので、また、どの詩にむかって飛んでいっているか、図表にして示してみよう。

朝 → コードII、IV、V、VIII、IX、XI、XIV

たそがれ → コードVI、VIII、XI、XII

十字架と伝説（宗教伝説） → コードVI、VII、VIII、IX、X、XI、XIV

道 → コードII、III、IV、V、VI、VII、VIII、IX、XI、XIII、XIV

古きことば、古い歌、古謡 → コードII、III、IV、V、VI、VIII、X、XI、XII、XIII、XIV

乞食 → コードIII、V、XI

なお、ここにあげたガリシアの世界の断片的要素は、筆者が作品全体の中で特に大きな役割を果たしているイメージの鳥と考え恣意的に選んだものである。選びようによっては、とうもろこし畑、亜麻畑なども加えられるかもしれない。

さて、次に、上の図表に示したコードIの断片的要素と他の詩との関連を具体的に説明する中

で、詩集全体における詩人の意識の流れを追ってみたい。

※

コードIの第1連で詩人の心の中に映じた故郷ガリシアの爽やかな朝のイメージは、コードII“朝の奇蹟”に飛んでゆき、小鳥がさえずり、聖性のかおりをばらまいて鐘の鳴る清らかな朝の詩となる。そして、さらにコードIV“田園詩”に飛び移り、この清らかな朝の情景のもと、そのすばらしさに心を奪われながらゆっくりとした足どりで畑へとむかう農夫らがまず歌われ、次に、とうもろこし畑、その穀物を碾く水車小屋、それからパンへとひろがってゆく連想、また、織の音から亜麻布、さらにぶどうの蔓や棚からぶどう酒への連想を経て、豊饒な田園の収穫の讃歌となる。しかし、田園はこのように爽やかで歓喜に満ちた情景のみを詩人に喚起させるものではなく、コードIの第2連で浮かんだ盗めた薪たきぎを背負いよろめきながら歩く老婆や第4連の象徴的な「乞食の祖母」のイメージがその中に飛び込んでくる。すなわち、あの明るい情景の中に、ガリシアの貧困の象徴としての、もの乞いをしながら各地を放浪してまわっていた不幸な人々の群れが現われる。コードIII“哀れなる神の子たち”とコードV“苦しみを語るなかれ”がそれである。コードIIIの詩では、詩人の心にこうして映じた故郷の美しい田園風景とその中を進んでゆくよるべのない哀れな人々との対照性が歌われる。朝の爽やかな野に（もっとも、コードIIIには朝の設定はないが、前後の詩との関連を考えるならば、朝の情景とみるのがふさわしい）その日一日の糧食を求めて出てきた乞食の民は、もの乞いをしようと郷士の館にたどり着く。その光景がコードVである。この世の不幸を一身に背負ったかのように朝の小道から乞食の苦しみを呻き発するキャラバンと世俗の悲惨さ、穢れといったものをいまだ知らず、館の内の庭園のようにひっそりと夢想の世界にひたり微笑する無邪気な少女との対照性。詩人は彼女もいずれは人生の苦しみに染まるようになるのだから、せめてそのすばらしい人生の黎明期だけでもそっとしておいて、その喜びにひたらせてやって欲しいと願っているのではないか。しかし、この詩において、詩人は乞食の民をつき放し、冷やかな目で眺めているわけではない。彼自身人生の辛酸を知るものとして、彼らの「同志」と考えているわけだから。

また、コードIの第1連の「山の頂で太陽が黄金の薔薇の花びらをめぐり落すとき」のたそがれの情景のイメージの鳥は、コードVI“たそがれの花”に飛んでゆき、これまでの詩の舞台となったガリシアの田園の夕暮れどきの情景の中にとまる。この詩では、まず、たそがれどきの畑の中の道を牧童たちが群れを導き戻ってくる様子が歌われ、次に、渴して水を求める羊から噴水が喚起され、この噴水により聖者の伝説がはっきりとした形で詩人の意識の中に現われてくる。また、この詩にはコードIの第2連の「十字架と伝説の深奥な道」のイメージが、牧童たちの歩くたそがれの道を通して飛来していると考えられよう。

※

さて、コードⅦにおいて詩人の心に喚起された聖者の伝説は、以下のコードⅦ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹの中で歌われることになる。この伝説とは詩人の生地ピリャヌエバ・デ・アローサとポンテベドラのちょうど中間あたりに位置する Armenteira の地の修道院で12世紀頃におこったといわれる奇蹟の伝説である。<sup>(4)</sup>これは賢王アルフォンソ10世のガリシア語による『聖母マリア古謡集』*Cantigas de Santa Maria*の第103の歌でうたわれているが、次のようなものである。<sup>(5)</sup>

行者グンディアンが永遠とはどんなものか知りたいと願うと、神がこの望みを叶えてあげる。行者は清らかな噴水のもと小夜啼鳥の歌声の中で法悦境にひたることになる。それから醒めると3世紀という長い時間が小鳥の歌のごとき一瞬間の間に過ぎ去ってしまっていた。

コードⅦ“ふたりの行者の対話”では、山の深い静寂の中での聖セレニンと聖グンディアンのふたりの行者の間答の様子が歌われる。そして、この詩の中で、死後の世界をかいま見たいという聖グンディアンの願望が表わされている。コードⅧ“熾天使鳥”は深い内容を含んだ詩である。最初の2連において、詩人の考える理想の愛の世界が明らかにされる。そこでは、「狼は牧群の中でひかえめに草を食」むし、「牝狼の乳房は仔羊に乳を与え」るし、また、「ひばりと鳶は同じ枝をねぐら」とする。つまり、現実の世界の弱肉強食の様相が消え、あらゆる生きものが共存し、すべてにおいて善意の支配する調和的な愛の世界が描き出されている。このような状況の中で聖グンディアンが体験したという奇蹟が以下の連において歌われる。この詩のタイトル“熾天使鳥”は噴水のほとりで歌う小夜啼鳥を天からの啓示を運んできた熾天使と見たてることからつくり出されたことばであろう。

さて、たそがれの魂が風に花びらを落すときに噴水のほとり、小夜啼鳥の歌声の中で法悦境に入った聖グンディアンは、夜空の星が消える夜明けにそれから醒める。コードⅧの最後の2連ではそれゆえに朝の情景が歌われるが、これが次のコードⅨ“奇蹟の光芒”を導き出す。すなわち、詩人の心に再び湧きおこった朝のイメージは爽やかな朝の野を自分の庵へとむかう聖者の姿と結びつくのである。

しかし、300年を経た後の「噴水の鏡を眺き込んでもおのれと気づか」ないほど老いた聖者には、帰路が判別できない。水車小屋のおかみに道を教えてもらい、自分の庵にたどり着いた聖者は、そこに住みついていた行者から、三世紀が過ぎ去っていたことを知らされ、奇蹟を悟る。また、「天使が墓を掘ろうとしているのを見」て、自分の人生のたそがれを感じる。

コードⅩ“ミサ集のページ”は伝説に関する一連の詩に属するものであるが、コードⅦとコードⅨにおいて喚起されたミサ集とコードⅧの噴水とそのほとりで歌う小夜啼鳥のイメージが結合して出来た詩と思われる。

※

コードIを飛び立ち、VI、VIIIを経たたそがれのイメージの鳥は、コードXI“フランチェスコのあやめ”の詩に舞いおりる。そしてこの詩にはコードIII、Vで登場した放浪のキャラバンが再び現われる。新鮮な朝の田園の道を通り、その日の糧食を求めて進んでいった乞食の群れが路傍の石やいばらで手足を傷だらけにし、報われることなく、おだやかな落日の光のもと、その夜の宿を求めてさまよい歩く光景が歌われている。しかし、コードIII、Vのところでも触れたように、詩人はこれらの悲惨な民をよるべのない状態のままつき放してはしまわない。すなわち、彼らが辛酸に満ちた旅路の果て、つまりその人生のたそがれにおいて、天からの恩寵により、からだの傷は癒され、夕べには新鮮なパンと美酒の晩餐を得るだろうし、朝にはあけぼのの光の衣につつまれることだろうと詩人は歌っている。

こうして、たそがれの野を進む乞食のキャラバンへの思いやりから、人生のたそがれどきにおいてみられるであろう天からの恩寵へと思いを馳せた詩人は、次のコードXII“たそがれの太陽”で、地上のあらゆるものにそのやさしい光を天からの恵みのように与える、おだやかなたそがれの太陽の讃歌をうたう。同時に詩人はたそがれの太陽が再び爽やかな朝の太陽となって甦ることから、蘇生への想いに囚われる。人生のたそがれは静寂の世界への前ぶれであるが、同時によりすばらしい世界への過程でもあるという考えが詩人の心に芽生えているのではなからうか。詩人は「ある日貧しくも漂泊の旅に出た」自分のかつての家にふりそそぐたそがれの太陽により、自分の疲弊しきった魂のやすらぎと新生への想いを吹き込まれる。

このコードXIIは、コードIにはじまりコードVI、VIII、XIにおいて現われたたそがれの太陽のイメージが最大限にふくらんだものである。

※

コードXIIにおいて、たそがれの太陽がもつ無限の再生の力に思いを馳せた詩人の心には、現実の生活の喜びが素直に伝わってくるようになる。そして楽しい人生の謳歌へと進んでいった詩がコードXIII“ムニエイラの調べ”ではないか。この詩には、また、コードIの第3連で歌われている「ローマに生まれし古きことば」、すなわちガリシア語による「古い歌の調べ」のイメージが飛来してきている。ぶどう酒の壺をまわし飲みしながら、歌をうたったり物語やうわさ話に興じたりし、陽気に労働にいそむ人々の姿が浮彫りにされている。ちなみに、ムニエイラ *muñeira* とはガリシア語の *muñeira*（これのもともとの意味は *molinera* である）からできたことばで、ガリシアの伝統的な民衆の音楽であり、踊りで、その軽快で陽気なテンポに特徴がある。

また、コードIで詩人の心に郷愁的に浮かんだガリシア語による「古い歌」は先の図表において示したように、コードII、III、IV、V、VI、VIII、X、XI、XII、XIII、XIVとほとんどの詩の最後にあらわれ、ちょうどコードIの「おまえの純朴な古謡の魂で口づけておくれ」という詩人の願いに呼応するかのように付け加えられている。

さて、我々はコードIにおいて詩人の心に浮かんだガリシアの世界の断片的要素が以下の詩へ

と飛翔している点、さらに、この詩集において詩人の意識の流れが一貫している点を確かめるべく個々の詩を追いながら、最後のコードXV「道にて」にたどり着くことになった。

この詩に入るまえに、これまでの考察の中であまり深く触れなかった「道」について考えてみよう。

※

この詩集には *camino*, *senda*, *sendero* といった道を意味する単語が多く現われる。先の図表で示したように、コードIも含めると、14編中の12編に出てくる。

Concha Zardoya は *Los caminos poéticos de Valle-Inclán*<sup>(6)</sup> の中で、この12編にみられる道を次のような3つのグループに分けている。

- 1) ガリシアの道……コードI、II、III、IV、V、VI、XI、XIII
- 2) やすらぎと聖性の道……コードVIII、IX、XIV
- 3) 死への道……コードVII、XI

しかし、筆者はこの分類があまり意味のあるものとは思わない。なぜなら、コードVIIとコードVIII以外の詩に現われる道はすべて同じ種類の道と思われるからだ。以下、その根拠を明らかにしてみよう。

まず、コードIで回想的に「十字架と伝説」の道、同時に、「たそがれに老婆らがよろめき通る」道があらわれる。これは宗教的なものを喚起するガリシアの道である。これと同様の道が以下の詩の大部分において現われる。すなわち、コードIIの小夜啼鳥の歌っている老道、この詩集で小夜啼鳥が天からの啓示を運ぶ天使の象徴として表わされていることを考えれば、この道が聖性と結びついたガリシアの田園の道であることは歴然とする。次のコードIIIの乞食のキャラバンがゆく花咲く道は、すなわち「哀れなる神の子たち」のゆく道である。コードIVの「農夫らがゆく野良の道」はコードIIで歌われているのと同様の、朝の青い聖性のもと、キリスト者の魂である鐘の鳴っている田園風景の中の道である。また、コードVの道はコードIIIと同じ巡礼のキャラバンのゆく道。これからもわかるように、これまでに現われてきたガリシアの田園の道はいずれも、宗教性と結びつけられており、Zardoya のように、1) ガリシアの道、2) やすらぎと聖性の道の分類はあまり意味のあるものとは思われない。

煩雑になるから以下の詩に現われる道への言及は省くことにし、『伝説のかおり』に現われる道を筆者なりに整理すれば、次のようになる。

コードIにおいて喚起された宗教性と結びついたガリシアの田園の道は、コードII、III、IV、V、IX、XI、XIVに現われる。宗教性との関連のみられない単なるガリシアの道はコードVI、XIIIに出てくるが、これがコードIにおいて喚起されたガリシアの道であることに変わりはない。

これに対し、コードVIIとVIIIに現われる道は上にあげたコードの詩とは全然性質の異なる道である。コードVIIの「果てのない道」はZardoya のあげている抽象的な「死への道」であり、また、コードVIIIの「巡礼に行く手を教える道」は夜空にたなびく天の川 = *Camino de Santiago* であ

り、地上のガリシアの道ではない。これらは聖者の伝説との関連で想起された観念上の道及び天上の道である。この意味でコードIの「十字架と伝説」の道のイメージと結びついた道であるといえよう。

以上のことをまとめれば、コードIにおける道も以下のコードへと飛んでゆくイメージの鳥となっていると考えることができよう。

※

さて、最後にコードXIVの考察を行なうことにしよう。この詩では、まず第1連で「希望の鳥」を求める詩人が歌われ、第2連には道を進みゆく巡礼が現われる。そして、第3連では伝説への言及があり、第4連ではこの伝説の息吹に触れた詩人が疲弊しきった魂を若返らせる。こうして最後の2連では、あけぼのの新たなる生命の光につつまれる様子が歌われる。すなわち、これはこの詩集全体にみられる詩人の意識の流れに相当するもので、その意味で、この最後の詩は作品全体をしめくくるエピローグの役目を果たしていると言えるのではないであろうか。筆者はここに至り、この詩集が、新たなる靈感を故郷ガリシアに求めた詩人が、かの地の喚起するさまざまな情景の中を回想的に巡り歩いたのち、新たなる息吹を吹き込まれ魂を甦らせるまでの詩人の魂の遍歴を歌ったものではないかという思いを深くした。

書き落したが、Valle-Inclán は1897年ポンテベドラをあとにしてマドリードに出るが、それから1912年再びガリシアの地に戻るまでの間、ずっと首都に居を定めている。

(1978. 9. 4)

<注>

- (1) 『聖なる花』と『伝説のかおり』の関係については María Antonia Sanz Cuadrado がその *Flor de santidad y Aromas de leyenda*, Cuaderno de Literatura Contemporánea, Madrid, núm.18 (1946) 中で比較研究している。
- (2) Melchor Fernández Almagro : *Vida y literatura de Valle-Inclán*, Taurus Ediciones, Madrid, 1966, pág. 174.
- (3) 翻訳のテキストとしては、Don Ramón del Valle-Inclán : *Obras escogidas, Tomo I*, Aguilar, Madrid, 1974中の *Aromas de leyenda* を用いる。
- (4) José Monleón : *El teatro del 98 frente a la sociedad española*, Ediciones Cátedra, Madrid, 1975 中の *La Galicia de Valle-Inclán*, pág. 87.
- (5) Guillermo Díaz-Plaja : *Las estéticas de Valle-Inclán*, Editorial Gredos, Madrid, 1972, pág. 107.
- (6) Concha Zardoya : *Poesía española del 98 y del 27*, Editorial Gredos, Madrid, 1868中の *Los caminos poéticos de Ramón del Valle-Inclán*, págs. 85-92 参照。